特集

全国に誇る佐世保の花

明治の時代から花きの栽培が盛んな佐世保市。宮、三川内、重尾、黒髪、柚木地域などで、バラやカーネーション、菊などが栽培されており、全国へと出荷されています。今回の特集では、近年全国的に人気が出ているアスチュルベの紹介や、技術と伝統を受け継ぐ花農家の皆さんの取り組みなどをお知らせします。

花き栽培の歴史

四季があり、豊かな自然に恵まれた日本では、全国各地で多種多様な花が栽培されています。本市の花き栽培の歴史は古く、市制施行と同じ明治35(1902)年に黒髪町で始まり、市の発展とともに花き栽培も広がっていきました。時代の流れとともに栽培方法も高度化し、新たな品種や設備を導入したり、品質の向上を図ったりしながら、高品質な佐世保の花を全国に出荷してきました。その技術と伝統は花農家の皆さんによって受け継がれており、現在も約70戸の花農家が約27ヘクタールの栽培面積で花きを栽培しています。

現在、佐世保で栽培されているのは、菊やバラ、カーネーションなど20種類以上。伝統的な花だけでなく、ラナンキュラスやキンギョソウ、円錐型の花穂(かすい)が特徴的なアスチュルベなど、草花の生産量も増加しています。品種によっては、大阪や東京をはじめ全国26の市場、そして海外にも輸出されており、その品質は全国でも高く評価されています。

花き業界が抱える課題

平成27年度の本市における花きの生産額は約11億円。本市の農業生産額全体に占める割合は約10%で、米、畜産、野菜、果物に次ぐ大切な一次産業となっています。

一方、全国の花きの産出額は、輸入切り花の増加や高齢化による栽培農家の減少などを背景に減少しており、花の消費量も、景気低迷による需要の低下や消費形態の変化などにより、年々減少傾向にあります。特に、世帯主年齢別年間購入額調査では、若年層になるほど購入金額が低くなっており、若年層の消費拡大が今後の大きな課題となっています。

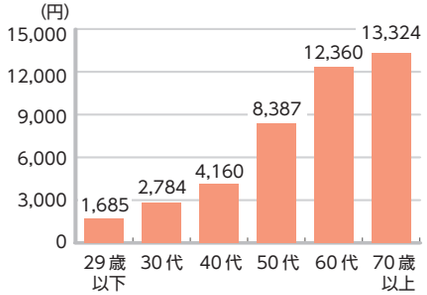
このようなことを踏まえ、本市では、さまざまな取り組みを通して産地の維持・拡大と後継者の育成を進めるとともに、地元で生産した花きの地産池消を図るため、花き園芸農業協同組合や緑水組合などと協力し、イベントや花育活動を進めることとしています。

心や生活を豊かに彩る花

春のサクラ、秋のコスモスのように、私たちは四季折々の花や植物を通して自然と季節の移ろいを感じてきました。生け花や花見など、日本ならではの文化もあり、見る人の心や生活を豊かに彩るものとして、私たちの生活に深く根付いています。

菊の消費拡大とPRのため、平成28年度から開催された菊の贈呈式

平成28年世帯主年齢別年間購入額
(出典：総務省統計局「家計調査年表」)



地元の花を購入してみませんか

本市で栽培されている花の多くは全国に出荷されていますが、佐世保花き市場を通して、市内のさまざまなフラワーショップにも出荷されています。また、市内の生産者市場などでも、地元花農家の出荷した花が販売されています。花は部屋に飾るだけで、リラックス効果やストレスを軽減する効果があるといわれています。最寄りの販売店や生産者市場で、佐世保の花を手に取ってみませんか。

佐世保の花を販売している生産者市場

- わくわくふれあい市
  重尾町 3272-1　☎ 38-4386
- ひう花菜(はな)市
  日宇町 2092-1　☎ 31-9138
- 柚木よかもん市
  柚木町 2274-4　☎ 46-2515

※その他の生産者市場でも取り扱っています。花の入荷状況などは日によって異なりますので、詳しくは各店舗にお尋ねください。

切り花を長持ちさせるコツ

切り花の水分は、葉や花びらから蒸発していきます。水を十分に吸収させることで長持ちさせることができます。

①花瓶に生ける前に、よく切れるハサミやカッターで茎の先端を数センチ程度切る

②こまめに水を替え、花器や水に浸かっていた部分の茎のぬめりを取る。水を替える度に茎を切る

佐世保独自の技術で生産量日本一の「アスチュルベ」

地道な営業努力とSNSで全国的な人気に

アスチュルベ部会　部会長　浦 純二さん

本市の宮、三川内、黒髪、柚木地域などで生産されている「アスチュルベ」。現在市内では9戸の花農家が年間約77万本を出荷しています。平成28年度の年間出荷額は約3千6百万円で、平成22年度と比べると約2割増加し、1本当たりの平均出荷額も37円から48円へと上昇しています。近年では市場を通じてアメリカや東南アジア等の海外にも出荷されるなど生産量も全国一で、高い品質の生産地として注目されています。今回はアスチュルベ部会の浦純二部会長に話を伺いました。

長年の研究で品質が向上

佐世保のアスチュルベ栽培の歴史は20年ほど前にさかのぼります。もともと園芸用に多く使われていた品種で、水上がりが悪いことから切り花には向かないといわれてきましたが、浦さんは「部会みんなで球根を分け合ったり、水上がりやカラーリングなどを研究したりしながら、これまで少しずつ生産量を増やし、市場での販売促進を行ってきました。水上がりが悪いと敬遠されることも多いですが、一度使ってもらうと、水上がりも持ちも良いし、使えると評判なんですよ」と話します。

佐世保独自のカラーリング技術

「1年に1度しか咲かない宿根草ですが、春と秋の2回咲かせる技術を確立したことで、生産量が確保できるようになりました。株に疲れも出るため毎年同じように作るのは難しいですが、生産者同士で自分たちの技術を教え合っています。少しずつ、生産のレベルが上がっていると感じています」と浦さん。市場に産地として認めてもらうには安定した供給が必要ですが、アスチュルベはバラやカーネーションなどの花と比べると確立された栽培方法がないこともあり、毎年試行錯誤しながら生産しているとのことでした。

また、白色やライトピンクが主流のアスチュルベをブルーやパープルにカラーリングする技術も佐世保独自のもので、花だけを自然に染めるその技術は「門外不出」とのこと。現在は全体の出荷量の1割がカラーリングで、業界関係者の間でも話題となっているそうです。

佐世保のアスチュルベを使ったブーケ
（写真提供）
フルールトレモロ（広島市南区）

流行だけで終わらせないように

近年、野の花のような自然な花が流行っており、関係機関の協力や地道な営業努力のかいもあって3、4年前から全国的に人気が出てきたアスチュルベ。「大阪や広島の花屋さんが佐世保のアスチュルベを使ったブーケなどの写真をインスタグラムやフェイスブックなどに投稿したことがきっかけで、全国から引き合いが増えてきました」と浦さん。結婚式などのブーケでアクセントとして花と花の間に入れる使い方をされていて、最近では部会でもSNSでの発信に力を入れています。

今は需要に対して生産が追いついておらず、値段が上がっているアスチュルベ。浦さんは「品質に見合った価格でないと離れるお客さんも増えます。ただの流行りの花にさせないよう、部会のメンバーを増やすなどして、さらに供給を安定させていきたいです」と今後の生産に意欲を見せました。ことしは新規で就農した若者がアスチュルベの栽培を始めるなど、明るい話題もあり、今後さらなる飛躍が期待されます。　（取材日：11月15日）

カラーリングされたアスチュルベ。パープルやブルーのほか、グラデーションに染めることもあります

ライトピンク色のアスチュルベ。ふんわりとした、たくさんの花びらが特徴です

新規就農者インタビュー

アスチュルベ部会　近藤成一郎さん（24）

花農家の親戚がいたことなどがきっかけで就農を決めて2年間の農業研修を終え、ことし10月に就農しました。年末には念願の自分のハウスを持つ予定で、これからが楽しみです。アスチュルベの魅力は何と言ってもかわいいところ。これから高い品質の花をたくさん作って、少しでも早く先輩たちと肩を並べられるようになりたいと思います。

（取材日：11月15日）

バラ

順調にいけば
やりがいも面白さも

金本バラ園・金本真一さん

バラ農家の２代目で、年間 40 万本のバラを市内を中心に出荷しています。現在 12 種類のバラを育てていますが、バラは毎年のように新しい品種が出てきて、移り変わりも激しい業界です。ついていくのは大変ですが、流行など先を見越しながら、生産性や市場性が落ちた品種を植え替えていっています。全国的にもバラ農家は高齢化や後継者不足が課題ですが、順調にいけばやりがいもあるし、品種もたくさんあって面白いと思います。やりたいと思ってくれる人がいれば嬉しいですね。

佐世保のバラ

市南部地域を中心に栽培されており、市内をはじめ、関西、関東方面に出荷されている。バラの出荷が最盛期を迎える６月には、父の日に合わせた産地 PR や消費拡大に取り組んでいる。

生産戸数：９戸　年間販売高：62,823 千円

蕾がふくらみ始めたバラ

カーネーション

安定して品質の良い
カーネーションの生産を

黒髪カーネーション
浦徹さん（左）、浦清一さん（右）

黒髪カーネーションは平成６年に設立した佐世保でも一番古い農業生産法人で、下宇戸町、心野町のハウスで約 20 種類のカーネーションを栽培しています。以前は国内の産地でしか競争がなく、高値で取り引きされていましたが、輸入が自由化されてからは、コロンビアや中国、スペインなどグローバルな相手と競争しなければならなくなりました。長年のノウハウがあっても、温暖化などの気候変動もあって毎年同じようにはなかなか作れません。安定して品質の良いカーネーションが生産できるよう、１年１年が勉強だと思って頑張っています。

佐世保のカーネーション

佐世保でカーネーションの生産が開始されたのは昭和 24 年と歴史が古く、現在も黒髪地域を中心に高い品質のカーネーションがハウス栽培されている。生産者も３代目が独立するなど、その技術は次世代へと受け継がれている。

生産戸数：８戸１法人　年間販売高：84,069 千円

出荷間近のカーネーション

菊

菊栽培は
難しいからこそ面白い

菊農家・丸田浩行さん

日宇、重尾のハウスで次男と三男、妻の４人で輪菊を栽培していて、年間約 40 万本を出荷しています。菊は病気や害虫にも気を付けないといけないし、温度管理も大変です。適期に咲かせるのは大変ですが、思ったように咲くとうれしいですし、難しいからこそ、日々チャレンジだと思って頑張っています。佐世保の菊農家は、私たちのように 50、60 代の同世代や次の世代が活躍しているところも多く、市場からも期待されています。これからも農家同士で切磋琢磨しながら、いい菊を作っていきたいと思います。

佐世保の菊

佐世保は九州でも有数の菊の生産地で、輪菊が日宇、重尾、宮地域で、小菊が柚木、重尾、鹿町地域などで生産されている。特にハウス栽培されている輪菊は「西海菊」のブランド名で全国に出荷されており、県外の市場からも高い評価を受ける。

生産戸数：輪菊 10 戸、小菊 14 戸

年間販売高：輪菊 178,389 千円、小菊 20,856 千円

丸田さんとご家族の皆さん

全国に誇れる佐世保の花

本市出身のフローリストで、佐世保観光名誉大使の中村有孝さんに、佐世保の花の魅力などについて伺いました。

佐世保の花について思うことは？

佐世保の花は東京の大田市場でよく購入していて、先日も佐世保のアスチュルベをデモンストレーションで使用したばかりです。品質も花の持ちもよくて、生産者の皆さんの努力を感じます。他にもバラやカーネーション、菊、キンギョソウ、ラナンキュラスなど佐世保の花は品質がとてもいいですし、全国に誇れるものを作っていらっしゃると思います。

最近では大田市場で佐世保の農家さんが積極的に花の PR イベントをされているのを見掛けます。そうやって佐世保の花を全国にどんどん発信されているのは、私としてもすごくうれしいですし、農家の皆さんの頑張りはすごく励みになりますね。佐世保でこんなにも高い品質の花が生産されているのを、少しでも多くの皆さんに知ってほしいと思います。

中村さんの考える花の魅力とは？

花は一輪でも食卓や玄関に飾ってみると生活が潤うような気がします。今までお花屋さんで買ったことがない人も、一輪でもいいので買ってもらって、花から幸せをもらってほしいと思います。

（取材日：11 月 22 日）

中村有孝さんプロフィール

「Flower's Laboratly Kikyu」（東京都渋谷区神宮前）を拠点にテレビスタジオやイベントの装飾、フラワーデザインのデモンストレーション・講習会を行うなど国内外で活躍。26 カ国のフローリストが参加した 2015 年インターフローラワールドカップで第４位となるなど、国内外のコンテストで多くの受賞歴を持つ。

問い合わせ　農業畜産課　☎ 24-111